

11/8 14:40 取扱注意 公開不可

暫定版

情報共有 (2枚 非管理メモ)

NISA班 + フォルダ対応チーム プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 11 月 8 日 (火) 11:00~11:20  
場所：東京電力本館 3 階大会議室  
先方：記者約 15 名 (カメラ 4 台)  
当方：原子力・立地本部 [REDACTED]  
原子力設備管理部 [REDACTED]  
広報部 [REDACTED]

配布資料：なし

[REDACTED] よりプラント状況に関して説明。

質疑：

Q. 免震重要棟にてパラメータ採取計器を監視している Web カメラ (計 8 台) が見られなくなったのは本日の何時頃からか。

A. 10 時頃から見られなくなった。福島第一原子力発電所から 10 時過ぎにその旨の連絡があったが、11:02 に全てのカメラが復旧したとの情報が入っている。原因については電源系、伝送系どちらによるものかを含め、現在詳細を確認中である。

Q. 本日未明 (0:25) に自動停止した 4 号機使用済燃料プールの塩分除去装置について、運転再開の目処は。

A. RO ポンプのケーシング付近に漏洩の跡があるとの報告を受けているが、現在漏洩箇所の特定、ポンプの交換が可能か等を含め確認中である。復旧等の見通しは未定だが、使用済燃料プールの冷却には問題ない状態である。

Q. 蒸発濃縮装置 (3B、3C) について、ボイラーの停止により装置が停止しているが、運転再開の目処は。

A. 当該装置については、昨日の 14:45 にポンプ B を使用し、ボイラー B を起動させ、蒸発濃縮装置の 3B、3C を再起動したが、本日未明 (2:20) に給水タンクにて水位低下の警報が発生し、再度停止している。現在、原因を確認中であり、復旧の見通しは未定であるが、RO 膜による淡水化装置稼働中であるので、淡水の生成については問題ない状態である。

Q. 原子力安全・保安院に提出予定である中期的安全確保の考え方について、提出の目処は。

A. 現在、施設運営計画 (その 1) の見直し作業を進めており、それがまとまり次第、原子力安全・保安院に提出する予定である。いわきにて開催された意見聴取会で出たご意見や原子力安全・保安院からの指示等を反映させていきたいと考えている。

Q. 今回、見直す点はこういったところか。

A. 説明をよりわかりやすくするといったことや、説明が不十分と指摘を受けた箇所の補足説明をしたいと考えている。

Q. 大枠の考え方は変わらないという考え方で良いのか。

A. 循環注水システムに含まれる注水や水処理設備が主な内容になるものと思うが、設備の不足や大幅な改造等はないものと考えている

Q. いわきで開催された意見聴取会にて冷温停止や炉内の状況の把握等について意見が出たが、今回の報告書ではそれらについて触れないのか

A. 現在、原子力安全・保安院と協議をしている段階であるが、できる限り反映したいと考えている。

Q. 故障等が少なくなってきたとはいえ、依然として水処理設備にて水漏れ等のトラブルが発生しているが、今後、ポンプやホース等を信頼性の高いものに交換するといった予定はないのか。

A. 注水や水処理のシステムについては、初期故障の段階を通り過ぎ、比較的安定した運転ができていると判断している。最近では特段大きなトラブルも発生しておらず、引き続き、施設運営計画でも記載した丈夫なホースへの交換等を順次行っていきたいと考えている。

Q. 今後、定期的にポンプやホース等を交換するのか。

A. 手段は色々あるものと考えているが、現在炉注水等で使用している使用しているポンプは比較的バックアップがとれる仕組みになっているので、定期的な交換も可能であると考えている。

Q. 2号機の格納容器内の水素ガス濃度が低下しているが、それに対する見解は。

A. 本日 9:30 の段階で、格納容器内の水素濃度は 2.3vol% であり、昨日 17 時時点より 0.1% 低下している。若干低下しているものの、引き続き様子を見る必要があると考えている。現時点では水素濃度が上昇した原因として、格納容器のトップヘッド部に水素が滞留していたことや、配管の行き止まり部に滞留していた水素が循環したことがあるものと考えているが、濃度については今後落ち着いていくものと考えている。

Q. 落ち着くのはいつ頃と考えているのか。

A. どの程度で落ち着くのかについては、最終的に窒素ガスと飽和水蒸気がどの程度存在していたのかというところで決まるものと考えており、今後検討していきたい。

以上

## プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 11 月 8 日 (火) 18:00~18:40

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 15 名 (カメラ 4 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

## 配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第二百二十八報)
- ・ 福島第一原子力発電所付近における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (第二百二十一報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口で採取した海水に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (11 月 7 日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について (11 月 7 日採取分)
- ・ 茨城県沖における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (続報 35)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水各種分析結果
- ・ 福島第一サーベイマップ (平成 23 年 11 月 1 日 17:00 現在)
- ・ 福島第一原子力発電所 1~4 号機使用済燃料プール水サンプリング結果
- ・ 福島第一原子力発電所 3 号機原子炉建屋開口部南側の状況

よりプラント状況に関して説明。

## 質疑：

Q. 4 号機の使用済燃料プールに設置した放射性物質除去装置は 20m<sup>3</sup>/h の性能とのことだが、現在の稼働状況はどうか。

A. 放射性物質除去装置は 2 号機の使用済燃料プールで設置している。4 号機では塩分除去装置を可動しており、8 月に約 2000ppm だった塩化物イオンが、11 月 5 日時点で 150ppm まで低減できている。

Q. 午前中に監視カメラに一部不具合があったが、今後の対策はどうか。

A. カメラ電源の NFB が落ちていたのが原因であり、電源を再度入れることで 11:02 にカメラは復旧した。原因については今後調査する。細かい不具合などについては一つ一つ解決していきたい。

Q. 1~3 号機の圧力容器の温度について、今後、どの程度まで低下させるといった目標値はあるのか。また、その判断基準は。

A. 目標値は定めていないが、冷温停止状態の判断基準としては圧力容器底部の温度が概ね 100℃以下と考えている。現在、1~3 号機の圧力容器底部の温度はその基準をほ

ば満足している状態。温度が下がることで放射性物質の放出量も低下するため、できる限り温度を下げたいと考えているが、今のところは注水量に比例している状態。なお、温度関係としては、温度計の信頼度について今後評価していきたいと考えている。

Q. キセノン検出の関連で、ホウ酸水を注入し続けられない理由として、酸による配管等への腐食といった影響を考慮しているのか。

A. 注入していたホウ酸水は弱酸性であり、若干腐食の可能性はあるものの、注入していたホウ酸水の濃度であれば、問題ないと考えている。注入を継続することで、配管内の急激に温度が低下する部分でホウ酸水が析出し、配管が詰まる可能性があると考えており、注意が必要と考えている。ただ、現段階では臨界のリスクは非常に低く、温度、圧力等で検知可能であると考えており、ホウ酸水の注入は不要と考えている。

Q. 事故当時の敷地内の放射性物質の放出量について、3月14日21時37頃に空間線量率が上昇しているが、その理由は。

A. 確認する。

Q. サーベイマップの空白エリアを今後測定していく予定はあるのか。

A. 測定だけでも作業員が被ばくするので、作業の事前サーベイ時に測定していく予定。

Q. 4号機周辺に空白が多いのは何故か。

A. 大型重機の解体作業などを行っているため。また、4号機周辺ではあまり作業が予定されていないので、具体的な更新予定はない。

Q. 2号機に放置されているクインスの現状は。

A. まだ回収できておらず、原子炉建屋3階の可燃性ガス濃度制御系付近にある。

Q. クインスを回収するか、放置するかという議論をするとのことだったが、結論は出たのか。

A. クインスの自力走行での回収が望ましいが、遠隔操作ができない状態。人による回収は出来るだけ回避したいので、まずは遠隔操作の復旧を目指している。最終的に遠隔操作の復旧が無理なようであれば2～3名で回収することになる。

Q. 遠隔操作をどう復旧させるのか。

A. 有線ケーブルによる遠隔操作が出来ない状況なので、制御室側から遠隔操作できないかを検討している。

Q. クインスの追加投入は予定しているのか。

A. 今のところ追加する予定はない。

Q. サイバーダイン社がロボットスーツを開発しているとのことだが、東京電力は認識しているのか。

A. 当社もロボットスーツの情報は把握している。元々は介護補助用器具と聞いている。格納容器内の高線量エリアでは重量のあるタングステンペストを着用することになる



の道筋会見にて最新値をお示ししたいと考えている。

Q. 今回の事故における放射性物質の総放出量については、海外の研究者などが色々評価をしているが、その妥当性についてどう思うか。

A. 当社としては原子炉建屋からの総放出量を把握したいと考えている。今後、避難されている方々が帰宅される際に、追加的に放出されている放射性物質でどれくらいの被ばく線量になるかを確認するために必要と考えており、年間1mSv以下を目標としている。7月以降毎月評価しており、炉心の温度も下がっていることもあり、順調に観測できていると思う。今回の事故での放射性物質の総排出量がいくつだったかは当社としても把握する必要はある。フランスや国内の研究機関がそれぞれ評価をしているが、他機関の結果を評価するのではなく、当社としての評価を改めてお示ししたいと考えている。

以上